

## 平安貴族の社寺参詣の一樣相

－『篁物語』における稲荷詣をめぐる－

仁 藤 智 子

【キーワード】 篁物語 稲荷神（社） 神階 奉幣 参詣

### はじめに

平安初期の官人である小野篁をモチーフとした文学作品『篁物語』には、異母妹が願を掛けて稲荷詣をする場面がある。

さて、この女、願ありて、二月初午に、稲荷に参りけり。供に人多くもあらで、大人二人、童二人ぞありける。君は、綾の搔練の単襲、唐の薄物の桜色の細長着て、花染の綾の細長折りて着たりける。髪はうるはしくて、丈に一尺ばかり余りて、頭つきいと清げなり。顔もあやしう世人には似ず、めでたうなむありける。男の童三四人、さてはこの兄とぞありける。まほにはあらねど、先立ちおくれて来ける。詣でざまに困じにければ、兄いと惜しがりて、「篁にかかり給へ」とて寄りければ、「いで、いないな」と言ひて、道中に居りにけり。（後略）<sup>1</sup>

異母妹はある願を掛けるために、二月初午の稲荷詣にわずかな供を連れて出かけた。万事心配な兄・篁があとをつける。この異母妹の願とは何かということが問題になるが、それは後述することにして、この箇所から気が付いたことを挙げてみたい。中流貴族の娘らしからぬお供は控えめで、成人女性が2人と童と称される未成人の女性が2人の合計5人の一行であった。これは、初午の日に混雑時に小回りが利く人数と認識されてのことと考えられる。こっそり後をつける兄である篁は男童3～4人というので、ストーカーまがいのいでたちである。異母妹は、おめかしをして人目を引く美しさだったと書かれるが、これは当時の社会において社寺参詣は、数少ない男女の出会いの場であったことによる。文学作品において男性が女性を見初めるのは、「垣間見」のほかは、社寺参詣、行幸や祭りの見物においてが多い。いつもより着飾って出かける異母妹の様相が気になって仕方ない篁は、悪い虫がつかないように随行しているのである。稲荷詣を終えて帰路に就いたころには、異母妹は疲労困憊で、ここぞとばかりに篁は自分に寄り

かかるように異母妹に促すのであるが、断られてしまう。ついに道に座り込んでしまった異母妹一行に、颯爽とした青年である兵衛佐が手を差し伸べて、男女の出会いが実現することになる。気が気でない篁は、異母妹の気を引こうと弁当を広げたり、挙句の果ては攫うように異母妹を自分の車に乗せて、強制帰宅させる。

この舞台となった稲荷詣とは、平安貴族にとっていかなるものであったのだろうか。

小稿では、歴史書に見える稲荷神の変化と、古記録に見える貴族たちの稲荷神への願かけの実像を踏まえつつ、文学作品にどのように稲荷神（社）や稲荷詣が描かれるか比較検討したい。稲荷詣の考察を通じて、平安時代における社寺参詣の実態の一端を明らかにすることを課題としたい。

## 1 歴史書にみえる稲荷神（社）

### (1) 『延喜式神名帳頭註』所引『山城国風土記』逸文・伊奈利社条の検討

稲荷神（社）の縁起を語るうえで、外せないのが、『山城国風土記』の逸文と伝えられるくだりである。以下、引用してみたい。

稲荷。本社。倉稲魂神也。此神素戔嗚女也。母大山祇神女大市姫也。倉稲魂神播百穀神也。故名稲荷歟。伊弉諾御女此名有之。一座素戔嗚。一座大市姫也。秘中之秘也。以上三座也。人皇四十三代元明帝和銅四年辛亥二月十一日戊午。始顕座伊奈利山三ヶ峰平处。風土記云。称伊奈利者。秦中家忌寸等遠祖伊弉臣秦公。積稲梁有富祐〔裕イ〕。乃用餅為的者。化白鳥飛翔居山峰生子。遂為社。其苗裔悔先過。而拔社之木殖家。禱命也。<sup>2</sup>

これによれば、祭神は、倉稲魂神であるが、父神は素戔嗚、母神は大山祇神の女、大市姫であるとされ、三神ともに祀られている。後述の史料には、「稲荷神三前」と記されている。創始の和銅四年二月十一日戊午の日にちなみ、二月初午が祭日とされている。縁起にかかわる説話は二つある。一つは、秦公伊弉が餅を射たところ、白鳥になって飛び去り、降りた山で、子を成した。その山を稲荷山といい、「餅一白鳥」伝承は穀物神を表すとされている。「倉稲魂神播二百穀一神也。」と見えるのもそれに対応している。もう一つは、秦公伊弉の末裔が先過を悔いて、社の木を自宅に移植したところ、木は命ながらえ、家は繁栄した。これが「しるしの杉」伝承へと繋がっていく。

この本文は、近年の研究では、7世紀に作られた風土記の逸文ではなく、後世に作られて「風土記の逸文」として伝来したものであるとされた<sup>3</sup>。引用されている『延喜式神名帳頭註』は、卜部（吉田）兼俱によって16世紀初頭に成立されたとするが、そのころには周知の伝承であったことになろう。つまり、この伝

承は、奈良時代のものではなく、後述するように平安中期以降に作られ広まったものが、室町期に集大成されたということになろう。

では、稲荷神の嚆矢はどこに求めることができるのであろうか。次節では、その様相を検討していきたい。

## (2) 六国史に現れた稲荷神

稲荷神の初見は、9世紀半ばの淳和朝である。『類従国史』巻34 帝王14、天皇不予の天長四(827)年正月辛巳条には次のように見える。

辛巳。詔曰、「天皇詔旨<sub>止</sub>、稲荷神前<sub>尔</sub>申給<sub>閉止</sub>申<sub>佐久</sub>。頃間御體不愈大坐<sub>須尔</sub>、依<sub>占</sub>求<sub>留尔</sub>、稲荷神社<sub>乃</sub>樹伐<sub>礼留</sub>罪崇<sub>尔</sub>出<sub>太利止</sub>申<sub>須</sub>。然<sub>毛</sub>此樹<sub>波</sub>、先朝<sub>乃</sub>御願寺<sub>乃</sub>塔木<sub>尔</sub>用<sub>牟我</sub>為<sub>尔止</sub>之天、東寺<sub>乃</sub>所<sub>レ</sub>伐<sub>奈利</sub>。今成<sub>レ</sub>崇<sub>利止</sub>申<sub>我</sub>故<sub>尔</sub>、畏<sub>天奈毛</sub>内舍人從七位下大中臣雄良<sub>乎</sub>差<sub>レ</sub>使<sub>天</sub>、礼代<sub>尔</sub>從五位下<sub>乃</sub>冠授奉理治奉<sub>留</sub>。実<sub>尔</sub>神<sub>乃</sub>御心<sub>尔志</sub>坐<sub>波</sub>、御病不<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>時日<sub>一</sub>除愈給<sub>留</sub>。縦<sub>比</sub>神<sub>乃</sub>御心<sub>尔波</sub>不<sub>レ</sub>在<sub>止毛</sub>、威神<sub>乃</sub>護助給<sub>波牟</sub>力<sub>尔</sub>依<sub>天之</sub>、御躬安<sub>波</sub>平<sub>万利</sub>給<sub>牟止</sub>、所念食<sub>止</sub>奉<sub>レ</sub>憑<sub>流止</sub>申給<sub>布</sub>天皇詔旨<sub>乎</sub>申給<sub>波久止</sub>申。」

この記事は『日本後紀』の逸文になる。淳和天皇が体調を崩したのは前年末からであったが、正月早々に不予になった。そこで、占わせたところ、稲荷神社の木を伐採した祟りであると判明した。もともと嵯峨天皇が御願寺の塔に用いようとして東寺が切り出したものであったが、淳和天皇の体に祟ったというのである。そこで、勅使を遣わして、從五位下という神階を与えたところ、淳和の容体はたちまち回復したというのである。稲荷神は、淳和朝に突如として史料に現れる。しかも、淳和に祟る樹が稲荷社のものであったということは、先述した『山城国風土記』逸文と伝えられる伝承の、「其苗裔悔先過。而拔社之木殖家。禱命也。」という部分と合致することに留意すべきであろう。「命永らえる樹」の伝承を持つ、平安京の周縁の神として、登場したのが稲荷神(社)であった。

仁明朝になると、承和十年(843)十二月に神階が從五位上に進められ<sup>4</sup>、翌年には從四位下に<sup>5</sup>、貞観十六(874)年には從三位に昇叙した<sup>6</sup>。承和十二(845)年には、稲荷神も明神の例に預かるようになる<sup>7</sup>。

文徳朝には、平安京を取り巻く土地神として信奉を集め始める。ことに注目されるのは、『文徳実録』嘉祥三(850)年十月辛亥条である。

辛亥。進<sub>二</sub>山城國<sub>一</sub>稲荷神階<sub>一</sub>授<sub>二</sub>從四位上<sub>一</sub>。授<sub>二</sub>攝津國<sub>一</sub>廣田神從五位下<sub>一</sub>。進<sub>二</sub>大和國<sub>一</sub>大和大國魂神階<sub>一</sub>授<sub>二</sub>從二位<sub>一</sub>。石上神。及大神大物主神。葛木一言主神等並正三位。夜岐布山口神從五位下。河内國恩智大御食津彦命神。恩智大御食津姫命神等並正三位。丹比神從五位上。伊勢國阿耶賀神從五位

上。尾張國熱田神正三位。越前國氣比神正二位。筑前國宗像神從五位上。  
竈門神正五位上。筑後國高良玉垂命神從四位上。肥後國健甞龍命神正三位。  
伊豆國三嶋神從五位上。

この時、山城国稲荷神をはじめとして、摂津国、大和国、河内国、伊勢国、尾張国、越前国、そして西海道の筑前国、筑後国、肥後国、さらに、東海道の伊豆国の各社の神階授与を通じて、神格秩序が形成された<sup>8</sup>。

その後の仁寿二（852）年には、

七月乙亥。遣使者。向賀茂。松尾。稻荷。貴布禰等名神。奉幣祈雨。  
即日得甘澍。<sup>9</sup>

とみえ、稲荷社で、賀茂上下社・松尾社・貴船社とともに祈雨の祭祀が行われている。正史においてはじめて、稲荷神が農耕神であり、賀茂などと並び称される平安京の土地神であると認識されていたことが明らかになった。祈雨の成果はあったようで、今後も祈雨とともに、止雨の祈願がなされていることが史料に散見する。

天安元（852）年になると、

乙酉。鴨祭如常。在山城國從四位上稻荷神三前各授正四位下。<sup>10</sup>

とあるように、「稲荷神三前」が初見する。これは、当初は倉稲魂神と父神の素戔嗚、母神の大市姫の三神を指したと考えられるが、時代が降りるに従って諸説が生じてきた。稲荷山の神が、山そのものから上社・中社・下社の三つに分かたれて信仰されるようになっていたことを反映するものと考えられる。さらに、翌年には、

壬辰。雷雨。此夜。左近衛大宅年麻呂於北野見之。當稻荷神社空中。  
有兩鷄相闘。其色似赤。相闘之間。毛羽散落。地雖相隔。見似眼前。  
良久而止。此語類妖妄。而記之。恠也。<sup>11</sup>

とみえ、雷雨の夜に、大宅年麻呂が遠く北野から、稲荷社の上空で、二羽の鶏が闘う情景を見たという怪異談が記されている。この怪異・怪奇の意味するところは別の機会に譲りたいが、平安京北部の北野から、南東にあたる稲荷山を意識しているのは、これらが平安京に接する周縁と認識されたことによるのであろう。

清和朝になると、貞観元年（859）正月には、全国 267 社の神格が固定化される<sup>12</sup>。その中で、山城国においては、賀茂上下社を別格として、松尾神を頂点に、

稲荷神は上位に位置づけられている。これは871年に撰進される『貞観式』における神名帳の撰定作業にリンクしていると考えられる。

貞観十六（874）年閏四月には、稲荷神は従三位となる。

乙丑七日。山城國正四位上稲荷上中下三名神並奉授従三位。告文曰。「天皇<sub>我</sub>詔旨<sub>止</sub>。稻荷神<sub>乃前</sub>申賜<sub>部止</sub>。申<sub>久</sub>。京都<sub>近</sub>之天。公私<sub>崇仰</sub>。坐<sub>御徳高</sub>。御冠猶<sub>卑</sub>。依<sub>利天奈毛</sub>。殊<sub>爾</sub>有所念行<sub>天</sub>。從三位<sub>乃御冠</sub>上奉<sub>利崇奉</sub>。此状<sub>乎</sub>。神祇大副從五位下大中臣朝臣有本<sub>乎差使</sub>天。御位記<sub>乎</sub>。令捧持<sub>天</sub>申奉出<sub>須</sub>。神<sub>奈可良毛</sub>聞食<sub>天</sub>。天皇朝廷<sub>乎</sub>寶祚無動<sub>久</sub>。常磐堅磐<sub>倍</sub>護幸<sub>比</sub>。奉賜<sub>天</sub>。天下平安<sub>爾之天</sub>。水旱之災。疫癘之憂無聞<sub>久</sub>。風雨順時<sub>比</sub>。五穀豐登<sub>世之女給波々</sub>。彌高彌廣<sub>爾</sub>榮飭<sub>利崇奉</sub>。無止<sub>天</sub>。申賜<sub>波止久</sub>。申。」<sup>13</sup>

この告文によれば、京都に近く公私の信仰を集めている稲荷社に「天下平安」で、「水旱之災。疫癘之憂」が無く、「風雨順時。五穀豐登」を祈願して神位を従三位とするという。当時の稲荷社に対する朝廷の認識がうかがえる。

9世紀の淳和朝に「樹」を掲げて突如現れ、貞観・元慶・仁和年間を通して、祈雨・止雨などの奉幣対象となった。稲荷神が、平安京周縁の重要な社と認識されて神格を三位まで上げてきたことを注視したい。

### (3) 平安中期以降の稲荷神（社）

10世紀には、国家の奉幣対象の神社が、伊勢と平安京周辺・畿内の神社に限定される。稲荷社は、先述したように、9世紀から国家の奉幣対象に入っていたが、10世紀半ばの村上朝には奉幣に預かる神社は12社から16社となった。一条朝には、藤原彰子が中宮に立后された年には21社まで拡大した。その変化を簡略に書き出してみる。

天徳四（960）年3月22日→奉幣12社

（伊勢、石清水、賀茂、松尾、平野、稲荷、春日、大原野、大神、石上、大和、住吉）

天徳四（960）年7月17日→奉幣15社・内裏潔斎

（石清水、賀茂、松尾、平野、稲荷、春日、大原野、大神、石上、大和、広瀬、竜田、住吉、丹生、貴布禰）

応和三（963）年7月15日→奉幣15社+伊勢の16社奉幣+龍穴など12社・祈雨

（伊勢、石清水、賀茂、松尾、平野、稲荷、春日、大原野、大神、石上、大和、広瀬、竜田、住吉、丹生、貴布禰）

康保三（966）年閏8月21日→奉幣16社・天候不順  
正暦二（991）年6月24日→16社+吉田・広田・北野の19社奉幣・祈雨  
正暦五年（994）年2月17日→19社+梅宮の20社奉幣・祈年穀  
長徳元（995）年2月25日→20社  
長保二（1000）年2月27日→20社+祇園の21社奉幣・祈年穀  
長暦三（1039）年8月18日に、21社+日吉の22社奉幣

このように、10世紀後半を通じて国家の奉幣を受ける社は拡大し、11世紀には、伊勢を頂点として平安京・京都とその周縁の社を含みながら同心円状に広がり、後世「二十二社」と呼ばれる社格が形成される<sup>14</sup>。この広がり、儀礼や祭祀によって生み出された境界によって区別される空間認識<sup>15</sup>と、領域や時期的段階など類似していることに留意したい。稲荷も平安京周縁の一角を担う社として、国家から奉幣を授かり、神階を与えられるようになった。しかし、その信仰の実態などはわからないままである。次に、古記録や文学作品から稲荷神（社）の実像に迫っていきたい。

## 2 古記録に見える稲荷神（社）

国家が奉幣の対象として稲荷神（社）を認識していたことや多くの人々の崇高を集めていたことは先述したとおりである。ここでは、平安貴族が稲荷社をどのように認識していたのか、いくつかの例を挙げてみていきたい。

まず、貴族の日記に初めて現れるのが、藤原忠平の『貞信公記』の延喜十九（919）年条である。延喜十九年十一月九日条には、

九日、令<sub>二</sub>極楽寺師達申<sub>一</sub>稲荷<sub>一</sub>云、若依<sub>二</sub>堂処崇<sub>一</sub>有<sub>二</sub>此病<sub>一</sub>、明日内除愈、随則堂<sub>一</sub>□停止云々。

とみえる。この一か月前に、醍醐中宮穩子が父親である藤原忠平の四十賀を開催している。また、同月の東宮保明親王の朝覲行幸においては、上機嫌で大いに酔ったと記していたが、11月になると体調を崩したらしい。上記の11月9日には忠平自身の病氣平癒のために、極楽寺僧を稲荷社へ派遣している。その結果、稲荷神によって彼の病は極楽寺の堂処の崇りによると判明している。このくだりは、先に触れた淳和天皇の病と崇りを彷彿とさせる。稲荷社は10世紀初めには、個人のための祈願がなされる先となっていたことがうかがわれる。また、『貞信公記』天慶八（945）年七月五日条には、

（前略）依<sub>二</sub>陰陽寮占申<sub>一</sub>、奉<sub>二</sub>賀茂・稲荷二社<sub>一</sub>祈<sub>レ</sub>雨、大納言行事。



とあり、陰陽寮の占により、祈雨のために、賀茂・稲荷社に奉幣がなされた。これは、先に見たような9世紀からかわらない対応である。

さらに、天暦四(950)年には、藤原師輔が孫の憲平親王(村上天皇東宮、のちの冷泉天皇)のために七社に奉幣祈願している。

二日、始<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>今日<sub>一</sub>三ケ日間、於<sub>二</sub>七箇社<sub>一</sub>、奉<sub>二</sub>為今宮<sub>一</sub>令<sub>レ</sub>祈<sub>二</sub>御息災由<sub>一</sub>、使僧八幡<sub>春運</sub>、平野<sub>寛仁</sub>、賀茂上<sub>正賀</sub>、下<sub>延喜</sub>、春日<sub>義合</sub>、大原野<sub>顯朝</sub>、稲荷<sub>辰應</sub>、(後略)<sup>16</sup>

とみえる。石清水八幡はじめ稲荷までの七社に、僧が派遣された。また、花山天皇即位に伴う一世一代の大神宝使が稲荷社を含む諸社に発遣されている<sup>17</sup>。

このように、稲荷神(社)は、10世紀には朝廷との関わりとともに、藤原摂関家とも深くかかわるようになっていたことが知られる。これは、稲荷社だけではなく、当時の祭祀形態が、「祭-奉幣」型から「祭-参詣」型へ変化していること<sup>18</sup>とも関連する。個人的な願掛けが、参詣という形をとって行われるようになったと換言できよう。『篁物語』の稲荷詣の場面も、このような歴史的な背景が整わなければ出現しない状況であったといえよう。

### 3 文学作品に見える稲荷社参詣

このような祭祀形態の変化が、文学作品の中でどのように現れるか、見てみたい。稲荷神(社)が出てくる早い時期の作品に『蜻蛉日記』がある。

九月になりて、世の中をかしからむ、ものへ詣でせばや、かうものはかなき身の上申さむ、などさだめて、いと忍び、あるところにもものしたり。一はさみの御幣に、かう書きつけたりけり。まづ下の御社に、

いちしるき 山ぐちならば こゝながら神のけしきをみせよとぞおもふ  
中のに

いなりやま おほくのとしぞこえにける 祈るしるしのすぎをたのみて  
はてのに

神がみと のぼりくだりはわぶれども まださかゆかぬ こゝちこそすれ

藤原道綱の母(936?-995)は、藤原兼家の訪れることを祈願して、稲荷と賀茂に参詣した。そのおり、「下の御社」、「中の」、「はての」と上中下三社に幣に歌を書き付けて奉納したが、願は叶わなかった。この二首目に見える「しるしの杉」は、『更級日記』にも2か所ほど言及されており<sup>19</sup>、10世紀以降、「樹」が願掛けの対象とされていることに注意される。淳和天皇の祟りといい、「樹」にまつ

わる信仰が稲荷神には存在していたことの証左になろう。

また、『枕草子』152段「うらやましげなるもの」にも、

うらやましきもの（中略）稲荷に思ひおこして参りたるに、中の御社のほど、わりなく苦しきを念じてのぼる程に、いささか苦しげもなく、後れて來と見えたる者どもの、唯ゆきにさきだちて詣づる、いとうらやまし。二月午の日の曉に、いそぎしかど、坂のなからばかり歩みしかば、巳の時ばかりになりけり。やうやう暑くさへなりて、まことにわびしう かからぬ人も世にあらんものを、何しに詣でつらんとまで涙落ちてやすむに、三十餘ばかりなる女の、つば装束などにはあらで、ただ引きはこえたるが、「まろは七たびまうでし侍るぞ。三たびはまうでぬ、四たびはことにもあらず未には下向しぬべし」と道に逢ひたる人にうち言ひて、くだりゆきしこそ、ただなる所にては目もとまるまじきことの、かれが身に只今ならばやとおぼえしか。（後略）

と、稲荷詣の山の昇降が体力的にきついの、追い越していく人がうらやましいと記されている。また、こちらは一度でこりごりと思っているのに、7回も参詣したなど自慢しているのも驚かされるとも言っている。清少納言も実際に稲荷詣でをしたのかは不明であるが<sup>20</sup>、初午の日の混雑の中でイライラしているときに、恰好など気にせず、すいすいと涼しい顔で何度も参詣を繰り返している人をうらやましいと感じており、読者たちもそれに相槌を打ってたことを考え合わせれば、11世紀には稲荷詣ではよくある光景だったのであろう。

『大鏡』にも稲荷詣での場面が描かれている。

この殿（藤原兼通）の御女（藤原嬪子）、式部卿の宮元平の親王の御女の御腹の姫君、円融院の御時にまゐりたまひて、堀河の中宮と申しき。幼くおはしまししほど、いかなりけるにか、例の御親のやうにつねに見たてまつりなどもしたまはざりければ、御心いとかしこう、また御後見などこそは申しすすめけめ、物詣・祈をいみじうせさせたまひけるとか。稲荷の坂にても、この女ども見たてまつりけり。いと苦しげにて、御むしおしやりて、あふがれさせたまひける御姿つき、指貫（さしぬぎ）の腰ぎはなども、さはいへど、多くの人よりは氣高く、なべてならずぞおはしける。かやうにつとめさせたまへるつもりにや、やうやうおとなびたまふまに、これよりおとななる御女もおはしまさねば、さりとして后にたてまつらであるべきならねば、かくまゐらせたまつらせたまひて、いとやむごとなくさぶらはせたまひしぞかし。<sup>21</sup>



円融中宮となった藤原皇子（945-979）は、父親兼通の愛情薄くしていたが、性格も人柄も申し分なく、信心も深かった。稲荷詣の旧坂でも大変きつそうにされていたが、気品が満ちていたとみえる。10世紀後半に、摂関家の子女も稲荷詣をしていたことが知られる場面である。また、光孝天皇が即位することになった光景を描いた場面でも、世継父子の稲荷詣でが描かれている。

小松の帝（光孝天皇）の、親王（人康親王）にておはしましし時の御所は、皆人知りて侍り。おのが親のさぶらひし所、大炊御門よりは北、町尻よりは西にぞ侍りし。されば、宮の傍にて、つねにまるりて遊びはべりしかば、いと閑散にてこそおはしまししか。二月の三日、初午といへど、甲午の最吉日、常よりも世こそりて、いたり事うで稲荷詣にののしりしかば、父の詣ではべりし供にしたひまるりて、さは申せど、幼きほどにて、坂のこはきを登りはべりしかば、困（こう）じて、えその日のうちに還向（げかう）つかまつらざりしかば、父がやがて、その御社の禰宜大夫が後見つかうまつりて、いとうるさくてさぶらひし宿りにまかりて、一夜は宿りして、またの日帰りはべりしに、東洞院よりのぼりにまかるに、大炊御門より西ざまに、人々のさざと走れば、あやしくて見さぶらひしかば、わが家のほどにしも、いと暗うなるまで人立ちこみて見ゆるに、-いとどおどろかれて、焼亡かと思ひて、上を見あぐれば、煙も立たず。さは、大きな追捕かなど、かたがたに心もなきまでまどひ亥かりしかば、小野宮のほどにて、上達部の御車や、鞍置きたる馬ども、冠・表（うへ）の衣（きぬ）着たる人々などの見えはべりしに、心得ずあやしくて、「何事ぞ、何事ぞ」と、人ごとに間ひさぶらひしかば、「式部卿の宮、帝にゐさせたまふとて、大殿をはじめたてまつりて、皆人まるりたまふなり」とて、急ぎまかりしなどぞ、もの覚えたることにて見たまへし。<sup>22</sup>

ここには、世継が子供の頃、父親に随行して稲荷詣したが、坂で疲労困憊してその日のうちには帰れられず、翌日帰宅すると、自宅の周辺は大騒ぎになっていた。近所に住んでいた式部卿宮人康親王が天皇として登壇することになったからだ、と述べている。初午日の稲荷詣は、大混雑で誰でも疲弊する様子が知られるように稲荷詣は体力勝負であった。

平安期の文学作品において、参詣の対象として稲荷が取り上げられているのは、以上の『蜻蛉日記』『枕草子』『更級日記』『大鏡』でだけある。決して多いとは言えない。これ以降は『今昔物語』を待たなければならないが、そこに描かれているように、11世紀以降は稲荷祭も盛大となり、平安京に住むと市民の信仰や祭りとし盛行していく<sup>23</sup>。『篁物語』はこの隆盛の中で、稲荷詣でという場面が

作成されたと考えられる。

## むすびにかえて

述べてきたように、歴史上は、9世紀に淳和天皇に崇った樹の出どころとして、突如現れた稲荷社は、神階を挙げて、『貞観式』と『延喜式』の神名帳では、平安京周縁の有力社となっている。国家から奉幣を受けられる社として定着する一方、10世紀には貴族の個人的な願を掛ける参詣の対象となった。それに対応するように、少ないながらも文学作品にも登場するようになる。11世紀以降には、平安京に住むと市民たちの信仰を集める社として、稲荷祭が举行され、盛行していく。稲荷社は平安京の周縁に位置する社の一つで、参詣は日帰り圏である。それにも関わらず、文学作品に人気があるとは言えないのが稲荷詣であった。

なぜ、『篁物語』で稲荷詣が語られるのか。

それは、貴族だけでなく平安京に住む人々の娯楽・流行を取り入れることが、物語という性格上必要であったからであろう。社寺参詣は、数少ない男女の出会いの場であり、『篁物語』でも、異母妹は兵衛佐と出会い、兄の篁をヤキモキさせる。兵衛佐との文通は、篁の妨害にあって途絶えるが、この稲荷詣では物語前半（第一部）の大きな転換点となっている。そこに描かれるのは、稲荷社の「しるしの杉」伝承が広まり、『蜻蛉日記』の道綱母のように願かけをし、願の成就を願うのが参詣する人々の姿であった。その中で、異母妹の願とは、良縁成就であったと考えられ、それが兵衛佐との出会いで叶ったのである。

このように、『篁物語』稲荷詣は、11世紀以降の稲荷詣が流行になったことを背景にして成立したといえよう。小野篁（802～852）の生きた時代とは一世紀以上ずれていることを指摘して、擱筆したい。

## <註>

- 1 『篁物語』を引用する際には、同載の中村一夫による承空本を使用する。
- 2 『群書類従』神祇二巻 23。『延喜式神名帳頭註』は、文亀三（1503）年ごろの成立とされる。これを表した吉田（卜部）兼俱（1435～1511）は吉田神道の創始者として著名である。
- 3 山城国風土記逸文とされるこの条については、諸説ある。荊木美行『『山城国風土記』と稲荷社』（『風土記研究の諸問題』）所収、国書刊行会、2009年、初出は2007年）。久米舞子「稲荷祭と平安京七条の都市民」（『史学』82号、2013年）では遅くとも10世紀には成立していたと推測されている。
- 4 『続日本後紀』承和十年十二年戊午条。六国史はことわらない限り、国史大系本を使用する。

- 5 『続日本後紀』 承和十一年十二月丁亥条。
- 6 『三代実録』 貞観十六年閏四月乙丑七日程。
- 7 『続日本後紀』 承和十二年十二月庚辰条。
- 8 これは一つの画期ととらえられる。加瀬直弥「文徳朝・清和朝における神階奉授の意義」(『平安時代の神社と神職』所収、吉川弘文館、2015年、初出2014年)では、この時と貞観元年正月の神階授与を合わせて、「嘉祥同時奉授」「貞観同時奉授」と名付けて、文徳天皇と清和天皇の代はじめの神階奉授は臨時性が強いが、国司からの要請が主原因であるとされる。
- 9 『文徳実録』 仁寿二年七月乙亥条。
- 10 『文徳実録』 天安元年四月乙酉条。
- 11 『文徳実録』 天安二年六月壬辰条。
- 12 『三代実録』 貞観元年正月廿七日甲申条。  
廿七日甲申。京畿七道諸神、□進階及新叙。惣二百六十七社。(中略)山城國正二位勳二等松尾神從一位。葛野月讀神。平野 今木神並正二位。正四位下稻荷神三前並正四位上。正四位下大若子神。小若子神。酒解神。酒解子神並正四位上。平野從四位下。久度古開神從四位上。正五位上貴布禰神。正五位下乙 訓火雷神。從五位上水主神等並從四位下 (後略)。  
稻荷神は正四位上に位置づけられた。
- 13 『三代実録』 貞観十六年閏四月乙丑七日程。
- 14 『百鍊抄』 永保元(1081)年11月18日程には、二十二社を永例とするとみえる。岡田精司「平安時代の祭祀儀礼」(『平安時代の国家と祭祀』所収、続群書類従完成会、1994年)は、中世への祭祀制度の基本体系は律令祭祀にあるのではなく、平安時代に形成されていた二十二社をはじめとする祭祀体制に依拠すると指摘した。近年では、小倉滋司「摂関期における貴族の神事観」(『摂関期の国家と社会』所収、山川出版社、2016年)で、摂関期の貴族社会では、藤原氏をはじめとする天皇とかかわりを持つ氏の祭祀が国家祭祀へ統合給されることによって、神事は天皇の専管事項であるという認識「天皇の斎王化」が形成されるとする。
- 15 拙稿「古代における王権の空間認識—平安京の形成と固関の展開—」(『平安初期の王権と官僚制』所収、吉川弘文館、2000年、初出1996年)。同「古代人の空間認識」(『國文學』48-14号 2003年)。
- 16 『九曆』 天曆四(950)年七月二日程。大日本古記録本による。
- 17 『小右記』 寛和元(985)年十一月十五日程。大日本古記録本による。
- 18 三橋正「古代国家の祭と天皇の神祇信仰—「祭—参加型」から「祭—奉幣型」へ—」(『平安時代の信仰と宗教儀礼』所収、続群書類従完成会、2000年、初出は1996年)によれば、平安時代の祭祀との関わり方の変化は、「祭—参加型」①氏祭—氏人が参加・②公祭—朝儀として挙行するものから、「祭—奉幣型」へ、さらに藤原忠平の頃から「祭—参詣型」

へと変化したとする。

- 19 菅原孝標女(1008-1059以降)『更級日記』27段「そのかへる年の十月二十五日」、32段「今はいかで、この若き人々」。新編古典文学全集本による。このほか、しるしの杉は『源氏物語』賢木や『狭衣物語』にもみえるが、和歌に多い。
- 20 清少納言(966-1025?)は『枕草子』269段「神は」で、松尾・石清水八幡・大原野・春日・平野・みこもりの神・賀茂・稲荷を挙げている。新編古典文学全集本による。
- 21 『大鏡』兼通の段。新編古典文学全集本による。
- 22 『大鏡』太政大臣道長(下)／雑々物語(くさぐさものがたり)の段。
- 23 久米舞子前掲注(3)論文を参照。